なるべきこと西域記及慈恩傳によりて證明し得べし)、其の國亂れしに因ると記せども、此の如く貞觀元年に既に頡利可汗に背きしなれば、其の歸附は貞觀元年以前のことなるや疑無し。

＊ 慈恩寺三藏傳には、玄奘が唐を出發したる翌年卽ち貞觀四年(六三〇)(三、四月頃ならん)に彼が素葉城に於て突厥の葉護可汗に逢ひしことを記せり、然るに大唐西域記縛喝國の條には「近突厥葉護可汗子肆葉護可汗云々」と見ゆ、されば貞觀四年に玄奘が逢ひたる葉護可汗といふものは、統葉護可汗なるべく、薛延陀傳に、同二年に死せりと記せるは誤なり、然れども又同年卽ち四年には西突厥の屈利俟毗可汗とて統葉護の諸父にして、統葉護を殺して立ちたるものが、婚を唐に請ひしこと、新唐書突厥傳、冊府元龜和親篇等に記さるれば、其の死が貞觀四年玄奘の訪問後に在りしこと疑無きが如し。

〔九〕 馬鬣山の位置は明かにし難けれど、此の戰に敗れたる突厥の軍が天山に逃れたることより考ふれば、必ず漠北の一地にして、又回鶻・薛延陀等の據りし地と甚しく遠隔の地には非るべく、其の名稱の類似よりすれば、長春眞人が和林河の西北一驛の地にありと記せる馬頭山卽ち今蒙古語に *morin tologai といふものに非ずやとも思はる。

＊ Howorth, History of Mongols I. p. 183 に引ける Paderin の蒙古旅行記に據る。

〔一〇〕 唐書西域傳高昌の條に可汗浮圖城の名見え、唐は其の地を廷州と爲したること見ゆ、廷州が今の濟木薩地方に當るべきは西域水道記卷三に徐松の論述せる所なり。

〔一一〕 回鶻が薛延陀に附きたることは、一六二頁に引ける新唐書の記事に見ゆる所なるが、舊唐書廻紇傳にも率其衆附于薛延陀と曰ひ、通典も亦之を記せり。

〔一二〕 新唐書薛延陀傳。

〔一三〕 新唐書突厥傳。

〔一四〕 舊唐書本紀貞觀十五年の條。

〔一五〕 新唐書回鶻傳。